

令和 5 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (5) 地域への文化発信の拠点となる取り組み

申請組織 An die Musik 実行委員会 (教育学部)

申請組織長 役職名 学部長 氏名 磯部 錦司

統括責任者 役職名 教授 氏名 宮田 俊雄

課題名 卒業生と教員によるコンサート ～音楽に寄せて～

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	宮田俊雄	教育学部・教授	企画運営、ピアノ演奏
	分担者	池田京子 澤田幸江 野村友紀	教育学部・特命教授 教育学部・非常勤講師 教育学部・非常勤講師	合唱指揮 ヴァイオリン演奏 チェロ演奏

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

平成 21 年第 1 回 山女学園大学教育学部室内楽演奏会「連弾からアンサンブルへ」を開催した。以来、毎年演奏会を行い、第 3 回目より教員のほかに第 1 期卒業生が参加し「卒業生と教員によるコンサート」として開催している。今回は 14 回目となり、第 2 期から 11 期までの卒業生が演奏に参加した。卒業生が次世代への教育を継続していく上で、卒業後支援となる目的で発足し、音楽を愛する気持ちを育むことができることは、違いを超えて共に生きる協調性を育むことができる。そのために教員は高い技術と音楽性が必要であるが、現場の教員として働く上で技術の維持が難しくなる。また教員が学生の尊敬を集め音楽教員への道を志すきっかけを作るためにも、卒業生と教員が同じ舞台上に立って演奏発表を行う意義があると考えている。

2. 事業方法 (特色・独創性) 等 (300 字程度で記述)

卒業生、在学生在が教員とともに演奏し、技術と表現の幅を越えてひとつの演奏会を作り上げる。従来の大学教育では卒業までを考えるが、卒業生への支援、技量維持については関心が薄いのではないかと。教員への志望動機は自分が指導を受けた教員の影響が非常に大きい。本活動は、大学教員の演奏技術の向上のみならず、卒業生の演奏及び指導技術の向上を意図している点では画期的な意味を持つ。卒業生の発表の場は、生徒、父兄など社会的な広がり生まれ、また同窓生たちの連携の場となる。在学生在も教員と共に舞台参加することは、学校教育の場から外に踏み出すことにより、生きた音楽体験の場となり真剣に考えるきっかけとなる。本学では実技面などに自信がない学生もいるが、少人数教育を生かしそれぞれの独自性を伸ばすことができる。合唱やアンサンブルの経験は互いに協調し、ひとつになって伝えることにより、音楽の楽しみを分かち合い人々との関係を築く人間性を育む力にもつながる。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

2023年2月24日(日) 名古屋市中区伏見 電気文化会館ザ・コンサートホールにて午後2時開演、午後4時終演

椋山女学園大学教育学部 卒業生と教員によるコンサート ~An die Musik~ 音楽に寄せて

入場者数 280名(整理券270名、招待状10名)

第1部

卒業生5名(第2、4、6、11期生)によるソプラノ独唱、フルート独奏

教育学部音楽コース有志26名による合唱 指揮・池田京子(教育学部特命教授)

第2部

宮田俊雄教授退任記念演奏～最終講義にかえて～

ピアノ独奏 宮田俊雄 (教育学部・教授)

ピアノ三重奏 宮田俊雄、澤田幸江(教育学部・非常勤講師)、野村友紀(教育学部・非常勤講師)

一般の多くの聴衆に支援されることは、椋山女学園の地域文化への発信として重要なことであると考えられる。前半の5名の第2期から第11期卒業生による演奏は、教職に就き練習時間の余裕も少ないながら努力し、表現したい気持ちが伝わる共感が持てる演奏であった。声楽・フルート・在学生による合唱と、呼吸を使った演奏表現という統一感があるなかで、各出演者の個性が際立っており音楽コースの学生のレベルの高さを示した。

後半は宮田俊雄教授退任記念演奏が行われた。ブラームスとコダーイのピアノソロ作品では研ぎ澄まされた深淵な境地を、ピアノトリオにおいては絶妙なアンサンブルと音楽表現で聴衆を魅了した。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①卒業後支援	②教員の質向上	③音楽文化活動	④生涯学習
⑤アウトリーチ活動	⑥情操教育	⑦同窓会活動	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

アフターコロナで演奏会の催行が戻りつつあるが、聴衆が戻ってこないという話を多く耳にする。そのなかで、本公演はたいへん多くの来場者を迎え、終演後の歓談も長く続き、盛況のうちに終えることができた。ピアニストで、教育学部で長きにわたり教員養成にも携わってこられた宮田教授の退任記念演奏ということもあり、在学生や卒業生はもちろんのこと、一般入場者も多く得ることができた。演奏会への感想では、卒業生の演奏が素晴らしく音楽を継続する姿に感銘を受けたこと、宮田教授の沈思黙考熟慮断行の演奏に圧倒されたこと、在学生からはピアノトリオの響きの美しさに触れたことへの感動もあった。またスタッフとして演奏会に携わった在学生からは、演奏会を支える仕事の経験がよい学びになったとの声が挙がった。今後とも卒業生と教員が共に作る演奏会を継続し、音楽を愛好する聴衆を幅広く育てていく機会としていきたい。

今後、次回の演奏会に向けて卒業生の希望者の選択、教員演奏の充実化など、これまでの課題、反省を踏まえて、企画運営やプログラミングなどを考えたい。昨今の土曜日、日曜日のホールの確保は特に難しく、また教師の仕事を持って出演する卒業生に合った開催時期を決めることも課題である。より内容の充実したものとなるよう取り組んでいきたい。